

第2回 四国生物多様性会議 高知グループワーキングレポート

e. 「まち」 レポート

テーマ：まち の生物多様性について

参加者：10 名

※以下のとりまとめの方法について、参加者からの意見やコメント、●はキーワード、・参加者の記入カードからの転記。

質問：「まちの生物多様性・生態系の問題点」「まちの生物多様性とはなにか」，そのほか自由記入

●まちの中の自然の在り方

- ・まちのなかにも保護エリアがあってもよい
- ・まちのなかの保護エリアが別の行動や資源などを生むことがある。その空間が様々な生態系サービスを提供する可能性がある。
- ・墓地の自然が大切。 まちの社寺林や墓地に、自然が残っているから大切。
- ・こういった自然がまちにはふさわしいかが分からない。
- ・まちの中に「〇%自然がないといけない」というような数値目標の設定が必要ではないか。
- ・まちに暮らす人々は本当に暮らしの中に自然を求めているのか。明らかにする必要がある。

●自然へのアクセスや利活用の問題」

- ・まちの人が自然にアクセスできていない。もう少し触れ合いができれば思う。
- ・まちで子どもに自然体験できる機会が無い。田舎で自然体験をさせようとする、親の個人的なつながりが必要なこともある。自然を体験する空間に入るために親の努力が無いと、子どもに提供できない。
- ・人と生態系とのつながりを大切にすることが自然体験の機会確保に繋がるのではないだろうか。

●環境教育の問題」

- ・生物多様性の享受者として、環境教育をもっと活用できないだろうか。
- ・自然に触れることを十分に許せていなかった。「危ないこと」「禁止」としてきた。アクセスできても利用できないで困るという状況が問題である。
- ・昔は、危険であるが、沼の中で遊んだりして、自然を味わっていたように思う。
- ・自然が「触れる」ことなく「見る」だけのものになっている。
- ・自然との触れ合いだけでなく、自然の脅威も伝えなければならない。

●まちでの活動のあり方の問題

- ・まちの人々は流行にとられてすぎではないだろうか。
- ・まちの自然保全も所詮はブームに終わってしまうのではないか。
- ・一過性のものであり、リピーターにならない。

●まちのなかでの生態系のあり方について

- ・まちとは何だろうか。まちの生態系、生物多様性を考えるときに、まちの定義が必要だと思う。
- ・まちは、安全・安定な自然と移り変わる自然の2つが共存していて欲しい。
- ・安心・安全な自然とそのままの自然の共存ができないだろうか。
- ・まちがあることで、人が集まる。そこに集まる生物もいる。人と自然がうまく共存できないだろうか。

●まちの人への生物多様性の伝え方

- ・まちの生活とつながるように生物多様性を伝えなければいけない。
- ・何をもって生物多様性を保全しているか、立場が違いすぎる。多様な人のニーズが存在することへの配慮が必要。
- ・保全とは、守るものなのか、人とのつながりを考えるものなのか。どのように行動すべきかを、明らかにしていく必要がある。

●まち（都市）の緑化保全について

- ・生物多様性の視点が足りないのではないか。
- ・まちに管理できないビオトープを作らないことが大切。
- ・緑地保全をするだけでいいのか。それは、片寄った生態系となるのではないか。
- ・都市の緑地を野生の鳥類が利用していることを認識してほしい。

以上